

【 舞姫が人間社会に示すもの 】

①私自身、舞姫を通して、豊太郎やエリス、相沢のことを知っていくにしたがって、彼らを鏡として自分自身を見つめ、更には人間の社会を見つめるに至った。

それは人間の生理的なものや心理的なものといった誰もが必ず持っている欲や自我、自尊心などを目の当たりにしたことによる。

私はこの作品が人間の人間らしい姿を凝縮したもののように思える。

そしてそれを暗に私たちに示し出している気がしてならないのだ。

つまり、舞姫自身が人間社会に、人間という生き物の奥底にあるものは、先に述べたような美しいとはいえない心であり、所謂人間はこのような生き物である

ということを示しているのだ。

②それらは、豊太郎とエリスと相沢、また、彼らに関わる人々やその間で起こった様々な出来事から窺うことができる。

まず、まず最も人間性が表れており、それがために多くのことを投げかけるのは豊太郎である。

豊太郎は「我が有為の人物なることを疑わず、また我が心のよく耐へんことを信じたりき」とあるように、自分自身に自信があり、そのこともあってかプライドもあった。

それにも関わらず、「独立の思想」を抱きつつも、結局は「人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ」「ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ」の

ように、自分という存在を自分の中だけに閉じ込めてしまう、弱く、哀れな心を過去から現在に至るまで引きずっている。

これらのことから、豊太郎は、人間は表面上のそれは心の作用によって抑制、または作り出されたものであるということを示している。

それは自らを尊び、自らに自信を持った心が必ずあるのにも関わらず、それを表面上に出させなくする、弱く臆病な心が強く影響していることによる。

例えば、写真を撮られることを嫌がる人は割といる。

女子ならなおさらである。

その人達は、声をそろえて「写真写りが悪いから。」と言う。

私が思うに、彼女らは「本当の自分はもっとかわいい（かっこいい）のに、写真では別人みたいにブサイクになっちゃう。」からというのが心理にあるのだろう。

「自分はもっとかわいい（かっこいい）」と信じる心があるのにも関わらず、それが「別

人みたいにブサイクになる」のが怖くて、その心を抑えて表面上は、つまり実際の言動では「写真写りが悪い」と言っていて、結局写真に写ることを嫌がるのだ。

次にエリスだが、彼女が豊太郎を愛していたかは定かではないが、豊太郎に出会った場面からは人間の人間らしさがよく見受けられよう。

エリスは「垢つき汚れたりとも見え」ない服を着、わざわざ人に見つけられやすい通りにある寺門の扉の所で泣いていたが、そんな人に「家に一銭の貯へだになり」と言われて、「そうか、かわうそうに」とお金を渡す人が本当にいるだろうか。

しかもエリスは15歳でビクトリア座に入り、2年たった現在では「場中第二位の地位」を占めている。そのことから感情を表現することには長けていたと思われる。

そういうわけでエリスは自分の利益のため、欲のために人を欺くという行動をとったと考えられる。

これらのことは人間の欲深さを明確に示している。

利益や欲のために人を欺くとまではいかないが、やはり私にも欲深な心が様々な場面で発揮されていることに気付かされた。

例えば、次の授業に成績に関わる小テストが控えているという状況の授業で、好成績を求めるが故、その授業中にこっそりと勉強していたりする。

いくら小テストで好成績を挙げたとしても、欲深な心が他の授業を疎かにさせたことになるのであれば、心から喜ぶべきではないだろう。

いづれにせよ、人間は窮まった状況に陥ると欲深な心が実際の行動として表れるものである。

相沢の言葉からも人間という生き物を表すものが見られる。

相沢は、豊太郎の不運で波瀾に満ちた過去を責めようとしなかったり、忠告をしてくれたりと豊太郎想いの良き友人であるが、やはり「朋友に利なく、己に損

あればなり」とあるように最後は自分にとってどうかということを物事の基準にしているように考えられる。

良い人間でも自我があり、やはりそれを押し通したいと考えるのは、人間として当たり前のことなのだろう。

このことを悟ったのは舞姫を読んでそう思ったのは言うまでもないが、それ以前にもある友人を見てそれに近いことを考えさせられた。

その子はとても優しく、いつも自分よりも他人を優先する子で、一緒にいて気が引けるほどだった。

しかし、その子が学級委員に抜擢されると首を横に振り続けた。

その子の性格から、「自分よりふさわしい人がいるのではないか」や「自分にはそんな責任は背負えない」と考えてのことだとは思いますが、皆が推奨しているのに、いつまでも受諾しなかった。

この場合、逆に了承しない方が皆が困るのにその子は自分を押し通した。

全く悪気は無く、むしろ良いように考えたからこうなってしまったのではあるが、結果的には「自我」を押し通したのだ。

③以上のことから、舞姫はその登場人物の人格や言動の背後にある心を多様に表現することによって、人間社会に、人間は心の奥底に醜く、粗悪な心を必

ず持っていることを示し、それに対するそれに対する憂えを読者に投げかけているのだ。

しかし一方で、舞姫を生んだ森鷗外自身にそのような意図があったかは判断しがたいものがある。

あくまで、この文章は豊太郎の目線から描かれているし、豊太郎、エリス、相沢だけが人間では当然ないからである。

その点で、森鷗外自身はこの作品を通して何が伝えたかったかは定かではないが、私自身はこの作品を通してこのような読みをし、少し冷淡ではあるかもしれ

ないが、人間とは所詮こんなものであると悟ったのである。